



# 黒盛り塚への帰還

開始条件: レベル5のブルート

目的: 敵の全滅

## 序章:

馴染みの石段を下り、一息つくと、古き死臭と肉が腐ったような悪臭のせいで、怒りがこみあげてきた。それは自分自身に対する怒りであった。以前にこの地下へと足を踏み入れ、この臭いを嗅いだ時のことを覚えている。グルームヘイヴンに到着して初めての仕事だった。恐怖で身がすくんでいた。

自分が恐怖している姿を、仲間の目の前で晒すことになるとは夢にも思わなかった。武装した盗賊どもの巢窟へと突撃するために、仲間は君を頼りにしていた。これだけの巨体だと、誰も君が恐怖を感じるなどとは思ってもしなかったようだが、やむを得ない時もある。

今もなお、この場所への苦手意識に悩まされている。だが「黒盛り塚の奥深くに、強力な武器が隠されている」という噂を耳にしたとき、君はその危機にひとりで立ち向かう絶好の機会を得たと思い、気づくと舞い戻っていた。

君は今、あの頃よりも鍛えあげられて強くなった。この階段を降りることに、もはや恐怖は覚えず、高揚感に満たされていた。あの暗き広間への突撃の後でも、どこかの不運な盗賊団が再びここを根城にしていればはしないかと、君は願った。

底まで降り、扉を蹴破る。どうやら失望せずに済んだらしい。



数知れぬ傷を負ったが、最後の部屋へと到達した。すべては記憶の再現だった……すなわちスリした盗賊と動く骸骨だ。

「あら、来る場所を間違えたわね」女の射手が語りかけてきたが、黙るよう手で制した。こんな愚か者たちとお喋りをして浪費する時間などない。

## 終章:

足を引きずりながら部屋の裏手にあった階段へと向かう。心の底から大声をあげて笑った。止めることができる者など誰もいない。

血の痕跡をたどり、地下墓地の下層に赴き、手がかりを求めて歩みを進める。運がよかった。あるいは盗賊たちは、君の哄笑に恐れをなしたのだろう。いずれにせよ剣は見つかり、それ以上の脅威などなく、そこを立ち去ることができた。

## 報酬:

アイテム 134 番〈武骨な剣〉



使用する  
地形タイル:

11b  
G1b  
L1a



盗賊の  
衛兵



盗賊の  
射手



生ける  
骸骨



負傷の鼠  
(× 2)



テーブル (× 2)